

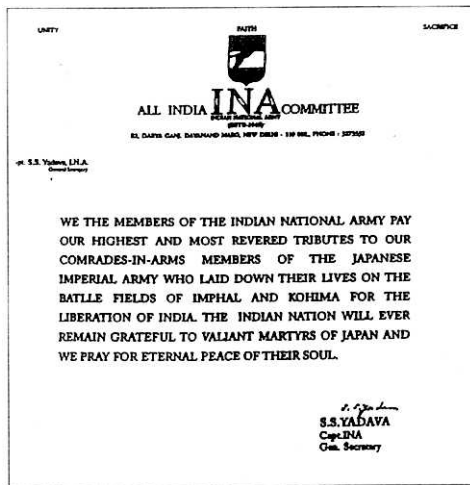
チャンドラボースと大川周明

山本
哲朗



日本軍と共に勇躍前線に進出するインド国民軍

インドからの手紙



太陽の光がこの地上を照すかぎり、
月の光がこの大地を潤すかぎり、
夜空に星が輝くかぎり、

インド国民は日本国民への恩は
決して忘れない。

P · N · Lekhi

(インド最高裁弁護士)

(訳文)

われわれインド国民軍将兵は、インドを解放するために共に戦った戦友としてインパール、コヒマの戦場に散華した日本帝国陸軍将兵に対してもっとも深甚なる敬意を表わします。インド国民は大義のために生命を捧げた勇敢な日本将兵に対する恩義を末代にいたるまで決して忘れません。我々はこの勇士たちの霊を慰め、御冥福をお祈り申し上げます。

1998年1月20日 於 ニューデリー

インド国民軍大尉 S. S. ヤダバ
(インド国民軍全国在郷軍人会代表)



スバス・チャンドラ・ボース

スバス・チャンドラ・ボース

スバス・チャンドラ・ボースは、愛国者である。祖国印度の解放者である。アジア被圧迫の隷属民族のため最後の血の一滴まで捧げた人である。革命家である。

第一章 インパール戦争 日本軍と共に

1. 自由印度仮政府

一九四三年十月、自由印度仮政府樹立（シンガポールにて）

チャンドラ・ボース宣誓

「予 神の御名において、ニコ印度および3億8千万人の同胞を解放せんことを誓う」10/21

日本政府は仮政府を承認。10/23

自由印度仮政府は米英に対して宣戦布告。10/25

大東亜会議（東京）11/05～10

オブザーバーとして出席したボースは各国の支援を謝し、

「この会議こそ世界正義、互恵主義、相互扶助の新秩序を創設せんとする会議であります」と、歴史的使命を強調した。

東条首相は、「印度領たるアンダマン、ニコバル島を仮政府に帰属せしめる」ことを宣言した。

昭和天皇は菊花薫る新宿御苑において茶話会を催された。夜は首相官邸で大晩餐会。

2. 印度国民軍征途につく

一九四四年三月、日本軍チンドウイン川渡河 03/15

三月二十日、自由印度仮政府声明 03/20

印度国民軍最高司令官

「印度国民軍は日本帝国陸軍の密接なる協力により、聖なる使命に発足せり。

印度人諸君。今や待望の自由を実現すべき絶好の機会なり。インドは全インド人がその任を尽さんことを期待してやまず」

一九四四年第一師団出陣式（ミンガラドン練兵場） 03/27

インド解放の日は来た！

デリーへの道は開けた！

征け デリーへ！

自由は血によってのみ購われるのだ！

チャロ・チャロ・デリー！

アキヤブの凱歌

ラトリー第一大隊は、カラダン川を北上し、当面のアフリカ師団を撃破し、インド領モウ

ドックへ進入し、母国の甘い自由の地に接吻して緒戦の志気を大いにあげた。

第一師団編成表

司令部最高司令官 チヤンドラ・ボース（メイミヨー）

第一連隊 シャナワーズ大佐（コヒマ）

第二連隊 キヤニー大佐（パレル左）

第三連隊 デイロン大佐（パレル右）

ジャンシー連隊 ラキシミリ大尉（メイミヨー野戦病院）

師団兵員 七〇〇〇名

第二師団はバンコクで準備中

「決して戦慄する勿れ、武人にとりて正義の戦いに優る及びなし」（軍神クリシュナ）

3. コヒマの死闘

四月四日 大本営発表

「我新鋭部隊は印度国民軍と共に四月六日早朝インパール⇨ディマプル道路上の要衝コヒマを攻撃セリ」

四月五日 ボースはメイミヨーに進出。

シャナワーズ連隊長に命令。

「連隊の主力は速やかにコヒマへ前進し、インパール陥落後、ラマプト川まで進出すべし」
包囲してから生死の戦い、コヒマの落としあいが始まる。テニスコートの柱をはさんで最後の
一発の手榴弾を投げて勇士は玉砕した。

三叉路を昨日は取って今日は取られ、守るも、攻めるも、一日交代、双方四千の屍の山。
英軍司令官スリム元帥の賞賛

「かかる状況のもとで陣形を死守することができるのは、日本軍を置いてほかにはないだろう」

祭兵団と共にインパールの正面ウクルルに進んだ第三連隊、弓兵団と共に北上してファラム、
ハカに進んだ第二連隊も、インパールを指呼の間に望んで、一兵の動きにも数千発の弾が飛んで
きて山形改まる鉄壁要塞に囲まれて、包囲した日本軍が囲みを破って生還できるかの運命に落ち
ようとしていた。ディマプールに向かった中隊は、突如正面に現れた英軍によって玉砕した。

デリーの日本語放送

ティデムの日本軍敗残兵は、今日も、まだがんばっています。豪雨と飢餓のうちに間もなく
自滅するでしょう。でなければ日本軍独特の壮烈なる玉砕をするために自殺するでしょう」

インパールを包囲しても、撃ちこむ砲も弾もない。心身限界の兵にあるのは、肉弾突撃、玉砕
のみ。「何か食わせてくれ。死んでもいい。死んだらラクにインパールへ行ける」

今日もまた糧秣一片もなし。日本軍に交渉するも、なんら反応なし。ガルワリー兵四名、予の
目前で餓死す。日本軍は我々を見殺しにせんとするか。(兵站は日本軍の分担)

兵は一片の塩もなく、野草によって飢えをしのぶ。 第一連隊 シャナワーズ大佐

四四年七月（日本軍は作戦中止）07/10

「たとえ日本軍が作戦を断念しても、国民軍は作戦を続行する。祖国の独立を闘い取る革命軍の進撃は、全軍魂魄となっても、祖国への進撃を止めないのが革命軍の本領である」

チャロ・チャロ・デリー

七月二三日（日本軍河辺司令官に説得されて）

「全員死力を尽くして撤退せよ」 チャンドラ・ボース司令官

死の退却、アラカン山中幾兵か帰る。谷間々々、間道河床、濁流滔々、足をとられ、手をとられ、疲労困ぱい、兵は波に飲まれていく。

4. イラワジ会戦

四五年四月二十日、方面軍はラングーン放棄 04/23

四四年十一月、東京から帰ったチャンドラ・ボースは方面軍に、

「万策を尽くして印緬国境付近に留めたい。不可能でもマンダレー以南に下がりはたくない」と要望し、国民軍再編に精力的に着手した。すでに第一師団はインパールで壊滅していた。

イラワジ平野は一望千里、飛行機と戦車の気まま自在。対する日本軍は山中飢餓地獄、アミー

バ・マラリア地獄、暗夜に乗じて少数ずつ脱出する。

イラワジ会戦は、日印軍が命運をかけた最後の決戦となった。国民軍はイラワジ川・サルウィン合流点東岸の要衝パガン防衛を命ぜられた。二月十三日、英軍戦車二千輛の急襲に向かつて、ポパ山を下って遊撃した第二師団、第一、第三連隊四千は激戦三日、帰還したのは五〇〇名にすぎなかった。ボース司令官はラングーンで玉砕を覚悟して動かない。

しかし、国民軍の第一次世界大戦にも参加したロガンタン軍医少将に「ネタジーには印度独立の使命がある」と、懇々たる説得、身をもって残存部隊五千をひきい、最後まで戦ってインド人を保護せんとする決意に動かされ、チャンドラ・ボースは特別声明を出して、ビルマ人及びビルマ政府に対して衷心からの謝意と国民軍將兵に対して声涙共に下る決別の辞を述べ撤退する。

5. チャンドラ・ボースの撤退

四五年四月二十五日、夜半、一行は政府要人を乗せた乗用車六台、ジャンシー部隊と国民軍兵士六〇〇名のトラック十五台の大部隊であった。

街道は混乱難渋、暗黒無秩序、豪雨泥濘、泥滑

「暗黒にも、光明にも、悲哀にも、受難にも、勝利にも、予は常に諸君と共にある」

チャンドラ・ボースは部下の最後の一人が安全になるまで車に乗らず、長靴をマメで真つ赤に染めて、魔の川シッターン越えてモールメンまで200kmを五月一日踏破した。途中シッターン川は川幅200mインド洋の干満10mの暴れ川。

堤防にドイツの鉄帽を被りダスターを着て、遙か西方を仰いでいたチャンドラ・ボースの姿は、「チャロ・デリー」の夢絶えて、落ち行く英雄の無念の心情、誰か知るものぞ。五月十四日、チャンドラ・ボースはバンコクに帰りついた。

6. 巨星墜つ

バンコクに帰ったチャンドラ・ボースは、全部隊をサイゴンに移し、志気振興、組織再建に回っていた。

八月十五日、日本降伏。

熟慮断行、チャンドラ・ボースはドイツ、日本そして三度目の進軍をソ連に求めることを決意した。

「独立のためには悪魔とも握手する」

八月十七日午後五時、南方総軍司令官寺内元帥の好意による特別機は、台北、福岡、大連、新京に向けて出発した。十八日午後二時、台北松山飛行場で給油をすませて離陸の瞬間、左のプロペラが飛んで、機は地面に激突、爆発、猛火に包まれて、台北南門陸軍病院でチャンドラ・ボース・ネタジー（指導者）は戦死。四十八歳であつた。

八月十五日、午後三時

ボンスレー国民軍少将は、威儀を正してタイ国陸軍省を訪れ、英軍・南東アジア最高司令官マウントバッテン卿へ依頼を託した。

「印度国民軍は、日本の一環、一部として取り扱われるときは降伏せず、最後まで抗戦する。ただし、独立軍として交戦権を認め、日本軍とは別個の取扱いをなすときは、降伏する」

第二章 印度国民軍の勝利 印度の独立

1. 一九四五年八月十八日午後八時

印度国民軍最高司令官より副官ハビーブル・ラーマン中佐に最後の命令

「貴君が印度に帰ったら、チャンドラ・ボースは最後の息をひきとるまで独立のために戦つたと伝えよ。私が死んでも、我々同胞はこの戦を続けよ！

インドは近いうちに必ず独立する」

チャロー・デリー・進めデリー！

インド・キ・ジャयी！

チャロー・デリー・進め！デリーへ！

世紀の愛国者が独立を目前に祖国の同胞に残した言葉である。

印度国民軍二万がチャロー・デリーの旗のもと、デリーに無血入城（復員）したのは四六年三月末日であった。全印度は、赤い城ラールキラでの印度国民軍と英国皇帝の戦いに注目した。

2. デリー軍事裁判

一九四五年十一月十五日

デリー・赤い城法廷

判事 判事長 ブラックスランド少将

他六名

被告 マ・ズ・サイガル大尉（ヒンズー）

シャナワーズ・カーン大尉（イスラム）

ガルボクミン・ディロン中尉（シーク）

検察官 エンジニア氏、ウエリリュ中佐

弁護士 ネール、デサイ博士 他十六名

罪状 印度刑法第一二一条該当

英国皇帝に対する戦争挑発の罪

印度刑法第三〇二条及び第一〇九条該当

殺人及び殺人教唆の罪

判決 無期流刑（十二月三十日）

主席弁護士ブラバイ・デサイ（国民会議派長老）

「隷属民族には闘う権利がある」

「裁判記録」ネール氏序文（抜粋）

「今まで、かくも大なる民衆の注意をひき、かかるが如き根本的国家的重要な問題を取り扱ったことはない。

今や、これら三名の将校および印度国民軍は印度の独立闘争のシンボルとなった。裁判は英国と印度との争いという点で、最も劇的となり、また人々の注意を集めた。

印度人と印度を支配している者との、意志の力くらべあいであった。その結果、凱歌は印度人にあがった。

一九四五年の最後の週に行われた第二の裁判は、その章のまさに終わらんとする前兆である。その終末が近づき新しいページがめくられつつあることに気がつくであろう。

今や印度の空気は変化に満ちており、我々は歴史をちがったふうにし書きなおそうとしているのである。」

ガンジーからウエーベル総督への手紙

「私は暴力には全面的に反対ですが、祖国のために勇ましく戦った人達を尊ぶことはやぶさかではありません。今裁判にかけられようとしている人達を全印度は敬愛しています。全印度の結集した反対を押し切つて権力を行使したら過ちをおかすことになりません」

「国民軍兵士は愛国者なり」「愛国者を救え」

印度全土は群衆の大デモ、衝突、流血に覆われた。ストは燎原の火の如く、インド海軍にまで

独立の火に包まれていく。ボンベイでは旗艦ナバタ号が、カラチでは旗艦ヒンドスタン号が反乱軍に押さえられた。ネルソン提督以来三百年、世界の海を制した無敵艦隊は、いま沈黙した。

三月五日、デリーは国民軍の花・ジャンシー連隊長ラキシミリ中佐の帰還歓迎に湧きかえり、二日後三月七日の英軍の日本降伏戦勝記念大パレードは弔旗で飾られ、凱旋門を血でそめ、断水、停電で、暗黒の印度に落ちた。

デIRON中尉は胸をたたいて、

「我々を一人でも処刑したら、印度在住の英人は一人でも生きて帰国はできないであろう」

在印ヨーロッパ人四万三千人の生命財産を護る力は、もはや女王への忠誠心を失った英印軍にはなくなっていた。

一九四六年一月三日

印度総司令官オーヒンレック大将発表

「軍事裁判の判決は、正当なりと確信するも、印度政府の方針にもとづき、総司令官の権限において、刑の執行を停止する」目下監禁中の主な将校四〇〇名の裁判も停止する。即ち、無罪釈放

3. 印度の独立

一九四七年八月十五日、印度は独立した。いま印度国会議事堂にはガンジーと並んでチャンドラ・ボース像がたっている。

チャンドラ・ボースは死してインドに凱旋した。

一九五七年十月、ネール首相は、愛娘インディラ・ガンジー女史を連れて訪日、連光寺に祀られているチャンドラ・ボースの遺骨を参拝した。

ネール首相は、この時、大川先生を迎賓館に招いたが、先生病重く、その機会を逸し、印度独立の両雄は遂に相見えることはなかった。

インパール戦死傷者

	参加数	死傷者
日本軍	七万八千	四万九千
印度国民軍	五万余	三万余
英軍	六万五千	四万余
大川塾	二六名	五名

4. チャンドラ・ボースの功績

チャンドラ・ボースは、敢然と英国皇帝に戦いを挑み、死して勝利した。

インパール戦争は国民軍の勝利、印度の独立、英国の没落。

世界の植民地独立の先駆けをなした。

天地開闢以来、下級将校・大尉が雲上の英国皇帝に「戦争を挑発して」無罪などと、万人が

想像の全く及ばないことであつた。

ましてや印度の独立が一九世紀後半「世界の植民地解放の引金」にならうとは。

印度を失つた英国は世界を半分する植民帝国の地位を失ひ、植民地は踵を接して独立し、残つたのは鳥も通わぬフォークランド島 (12,173 km²) のみとなつた。

一九六〇年代はアフリカの解放、続いて印度洋・東南アジアはオランダ、フランス植民地の解放、アメリカは広大な大地カナダを始めとしカリブ海の島々の独立、南はマゼラン海峡の突先までの、一九九〇年代は鉄腕スターリンに縛られた中央アジア、コーカサスの植民地の搾取苦難にあえいできた、全世界の植民地に自由愛国の炬火に火がついてしまった。いまや奇跡の世界革命にまで連鎖して集団独立である。

チャンドラ・ボースは常に「革命」を目指していた。「祖国の独立を闘い取る革命軍の（インクラブ）進撃は、全滅に陥つても止むことのないものである。（日本軍の作戦中止命令に対して）チャンドラ・ボースは、一九三九年三月、第五十二次国民会議において「革命のために暴力も辞せず」と、ガンディ派の賛成を得られなかつたため議長を辞退した経歴をもつていた。

インドとパキスタンは血を流してインドを二分したが、チャンドラ・ボースは、宗教の違いには全く平気で、ヒンズー、イスラム、シークの部隊を編成して協同作戦を命じていた。

また「国民軍は愛国者」と呼ばれたが、国が夫々違うので困つたものだが、チャンドラ・ボースは、「アザート・ヒンド（自由印度）」一國で通していた。

第三章 スバス・チャンドラ・ボースを迎える

印度独立においてガンディの活動を見落とすことは出来ないが、最後にはガンディは断食には勝ったが、イギリスには復た敗けたとなる。ガンディの政治家として現れた「魂の力だけでは、イギリスの印度を縛る鎖を断つことは、絶対に不可能である。ガンディ理想の魂の力に加うるに剣戟の力をもつてして初めて実現されるであろう。吾等はいま「印度の剣」とも言うべきスバス・チャンドラ・ボース氏を迎えたことを欣ぶ」

「日本は、日本の勝利が、印度独立のために千載一遇の好機たるべきを信じ、古へ積尊より受けたる教に対する最上の返礼として印度独立のために援助を提供せんとする以外、また他意あるのではない。」

大川塾のスタート・ラインは『正直と親切』、任地では一人でも二人でも魂の友を作ることであつた。

大川先生 チャンドラ・ボースを励ます

一九四三年一月、大東亜会議に出席したチャンドラ・ボースは、一四日、日比谷公会堂をうめた大群衆に講演会を開いた。大川先生は、

「この日は丁度日曜日に当たり、早朝より聴衆は長蛇の列の陣を作りて開場を待ちつつあり、ボース君も満足なるべし。十時開会、約一時間半ボース君の演説あり。気陥思いしより上がらず、

何となく寂しそうなり。余は簡単に激励の辞を述べて退場す。」(大川日記)

当日の出席した大川塾生山田勲氏は、

「日比谷公会堂での忘れられないのは、閣下がまだ小学生のとき、アジアの日本が大国ロシアを破ったことで希望を持ったことや、ガンジーは非暴力不服従で、ネールはペンで闘っているが、私は剣を持って戦う」と語られたことである」(手記)

大川周明先生

1. ポール・リシャール

1. 大川周明先生は、一九一三年夏、コトンの「新印度」を読んで、「仏陀降誕の聖地」から、阿鼻叫喚、民衆の悲惨、印度における英国の不義を見て、復興アジアを生命とする一戦士となった。一九一七年、先生はフランスの哲学者・詩人のポール・リシャール夫妻を迎え、乞うて「告日本国」という小冊子を出版した。詩は告げる。

『曙の児等よ、海原の児等よ。

貴国こそ自由をアジアに与ふべきものなれ。

一切の世界の隷属の民のために起つは貴国の任なり』

2. 大川塾

大川塾は「復興亜細亜の塾」であり、それが単なる知識に止まらず、亜細亜民族解放の使命の実践を、大川先生は卒業生に期待した。それによって学者の構想から民族平等の革命思想としてアジアに発展するスタートであった。

二年間、全寮制、寝食を共に教えこんだ弱冠二十歳の愛弟子二十名を毎年アジアに送りこむ

実践は、大川先生の「復興アジア」の建設に不断の生長をとげて往くであろう。

卒業した塾生九六名中二六名は印度独立戦に、二二名は仏領印度支那独立戦に参戦した。

3. みんなみ三筆 陸軍一等兵の記録

1. 山下司令官の通訳 一期 岩崎陽二

開戦と同時に南タイに上陸した山下兵团司令部は、山腹の要塞に立てこもったタイ軍司令官と対峙して既に二日、なんとか、平和通過しようと、参謀と通訳に私を軍使に選んだ。

林立する銃剣に囲まれたタイ軍司令部に到着すると、顔なじみの州知事や地方警察司令官が飛んできて、「ナイー・イワサキが来た！」と、私に抱きつかんばかりの握手に迎えられた。以後、山下司令官がタイに居る間、専属通訳を果たした。

日タイ戦わず 昭和十九年夏、「明朝五時を期してタイ国軍が日本軍を攻撃」との情報が入った。真実とすれば、日本軍は先制攻撃以外にないと、大使館内で極秘会議が延々と続いた。私が呼ばれ、バンコクの警察副司令官チャルンから情報を取ってくるよう命ぜられた。

時間も用意もない。チャルンの家を直撃した

「ナニー・イワサキ、何の用事ですか？」
実はこれく、しかじか。

「ナニー、何をバカな。それが本当なら今頃わたしがこんなことをしていただけるものか」
副司令官はパジャマ姿で、お誕生の孫と遊んでいた。私の帰りを待っていた山田参謀長は、
「ご苦労、信じます」と。

情報を真に受けていたら、日・タイの今日はどうなっていたらろうか（了）

2. 船舶工兵一等兵の軍使 一期 三浦琢二

白衣、白帽、白手袋、白靴に変装してフランス軍駐屯地へ立派な軍使。

「日本軍の軍使である。無血開城を要求する。ダコールか？、ノンか？ 返事は十分以内！」

「ノン、ノン、司令部から命令がない！」

その時、一発ドカーン。メコン河の砲艦から。

「ダコール！ 受諾する！」

私は白旗を左右に大きく振った。交渉妥結！ 日本軍史上、白旗を振った兵は私一人だろう。

英軍総司令官マウントバッテン伯爵と握手

元帥閣下がB級戦犯容疑者収容所視察に来られた。

日本軍は中将以下、上から星の順で誰も尻込みして、とうとう最低の私が代表して、

「尊敬する元帥閣下が観閲にお見えになられたことを光榮に存じます」と挨拶した。
元帥と握手を交わした。我が家の光榮であった。

英印軍はランニングを、我が方は三回戦の野球を披露した。(了)

3. バーモ暗殺未遂事件 二期 友田光男

昭和十九・二・十五、バーモ長官を暗殺するため浅井が訪ねてきた。ビルマ国防軍の反日感情、ビルマ人の反バーモ感情を考えて、バーモ長官をオン・サン將軍に変えた方がよいと思ったので協力を約束した。

翌日、浅井はバーモ官邸に行き計画は失敗。同日、憲兵が私を逮捕に来た。

三月二一日、軍事法廷

(求刑)	浅井	無期懲役	(判決)	監禁十五年
	友田	三年半		同 三年
	牛島	二年半		同 二年

閉廷後、裁判長・坂口大佐に呼ばれ、

「今日の君の態度は立派だった」と。一ヶ月たった頃、バンコクから菅先生が面会に来て「君を信じている」と言われたのは有難かった。

ある日、ビルマ人の食事を見て、とても、人間の食物ではなかった。植木・刑務所長は、大川

先生が五・一・五日事件で巢鴨拘置所の看守長であった由で、「何かの因縁があるだろう」と言われた。私は「彼等の食事の改善を」お願いした。翌日から私は朝の買出しに看守と出かけビルマ人の好む材料を買出して、食事は大いに改善された。

日本は負けたのではない。 オマル・トモダ

バンコク旧競馬場キャンプに収容され、印度兵が修理したジープの最終チェックをしていた。

ある日、警備のパタン族の軍曹が本を読んでいた。覗いて見るとペルシャ語の小学生用の教科書らしかった。二、三行読んでいくと、軍曹は目を丸くして、びっくりした。

「どこで勉強した？」

「東京のモスクだ」

モスクは大きいか？ 小さいか？ 信者は？ 次から次への質問である。

「お前の名前は？」

「オマル。オマル・トモダ！」

この日から「オマル・トモダ」はキャンプの人気者になった。

ある朝、いつものように四、五人に囲まれて、

「朝めしは食べてきたか？」「うん、食べてきた。」

みんな不審な顔をして、いつもと違う。

「オマル、今日から断食を知っているか？」

しまった！ 知る筈はない！ バレちゃうか！

とっさに口にでた。

「ジハード（聖戦）だ。あなた方は勝つて戦争は終わった。私は日本に帰るまで終わっていない。聖者ムハンマドはジハード中は断食しなくていいと言っている」

「そうだ。く。く。」今まで以上に煙草や砂糖をくれるし、車で送ってくれる。連隊本部に呼ばれた。リーダー格の将校から、

「日本は戦争に負けたのではない。エムペラーの命令で戦争を止めたのだ。日本に帰ったら、一日も早く再興するように。我々はその日を待っている。アラール・アクバル！」
その言葉に私は思わず涙が溢れるのを止めることが出来なかった。（了）

「君の若いのに驚いた。位の低いのにも驚いた。日本が負ける筈だ。」

英国特務機関員

「チ・コ・モツサオ」（星がたった一つ）山を往く。中国を歩いてベトナムへ。

ベトナム戦記 四期生 伏見三郎

あとがき

八月十五日 水

晴暑 正午陛下親しくラジオにて放送し給ふ。英米ソ三国共同宣言受諾。
わが四十年の興亜の努力も水泡に帰す。四時帰村

大川先生の太平洋戦争は、

「冥土の旅の一里塚 目出度くもなし 目出度くもなし」で始まり、

「夏の日は照り輝けど負けいくさ」で終わる。

『復興アジアの諸問題』は、コットンで始まり、スバス・チャンドラ・ボースで終わる。

舞台はインド。アジアの大国インドの自由、独立である。

相手は大英植民帝国である。「英国は百のシェークスピアを失うも、印度の保全に焦慮する」英国の問題は印度の問題であり、英国は、一旦印度を失わば、断じて世界的帝国の地位を保つことが出来ない。…カーゾン卿

『この書、世に出てより約二十年、復興アジアは荊棘ケイキョク(いばら)の道を歩み続けて今日に及んだ。』と、再版の「ことわり」に書いている。(初版1932年)

『偉大なる思想は、それが単なる知識に止まり実践的意欲を伴わざる場合は思想として無力である。大東亜精神は学者の構想によつて生まれず、大東亜建設を生命とする戦士の行動の中に

生まれ、建設の進行と共に不断に新しき成長を遂げて行くであろう。』(昭十八・五)

「復興アジア」は大川先生に下った天命である。

先生は文人である。

先生の「復興亜細亜の諸問題」の思想は塾生の実践を以って本領とする大事業であつた。

先生は、『三国』『三国魂』とよく言われた。吾々の日本精神は、支那、印度の思想文化を受け入れること、即ち儒教と仏教を取り入れたから今日あるを得たのである。自由を獲たる印度と覚醒せる支那とが日本と相結ぶことによつて新しき世界文化の創造もまた初めて可能である。

先生は、寮生に対する訓示において、

現在なさねばならぬことは、『第一に支那事變の解決』をあげている。(昭十五年四月)

大川・東條会談(一九四〇年十月末)

蒋介石はナチス独逸リッペントロップ外相の斡旋による、日本軍の撤兵を条件として和平を同意。大川は「撤兵は日本を救うもの」

東條は「撤兵は靖国の英霊に申し訳ない」と拒絶。

大川は支那派遣軍板垣征四郎中将の協力の下に浙江財閥工作に転進。

大川先生の対米戦争回避・对支和平工作

虎穴に入らずんば虎子を得ず。先生は、日本企業が総引揚げしているとき、アメリカ・ネバダ

州に汎太平洋通商航海会社を設立した（一九三九・八・三〇）。資本金三億ドル。

この会社はアメリカの法律に従い保護され、早速国務省からガソリン六万トン在日本輸出許可をもらい（一九四〇・一〇・二五）、バーターとしてタングステン一千トンを受注した。

先生は支那に飛んで、タングステン集荷に日本軍の協力を依頼して回った。一千トンは支那全体でも一年かかる大仕事である。蒋介石は全軍にタングステンの移動を禁止していた。

大川先生の太平洋平和構想 アメリカから石油を輸入し、日本の技術を加えて支那の産業、特に農磁業を開発して、タングステンなどをアメリカに輸出して、バランスを取る。

先生は「この仕事の第一段階は99%は成就して次の第二段階は来年三月を見込みに完成することになる。それが成功した暁には日本が現在の窮地を脱して大躍進をなし、世界史に偉大なる足跡を印す第一歩となるであろう」（一九四〇・二・八、訓話）

十二月八日、さすがの先生も全く真珠湾は寝耳に水で、大分驚いておられた。先生は、それまで米国側との書簡の一切を焼いてしまわれたので、先生の奔走尽力を伝える資料はなく、一般にはその経緯を知る人もない。

大川先生苦節四十年、復興亜細亜の大川塾も、太平洋平和の海も、邯鄲の夢ならんか。

されど、『正直と親切』は人類永遠の宝。

「チャンドラボースと大川周明」

平成二十七年六月二十日 第一刷発行

著者 山本 哲朗

印刷 株式会社 興栄社